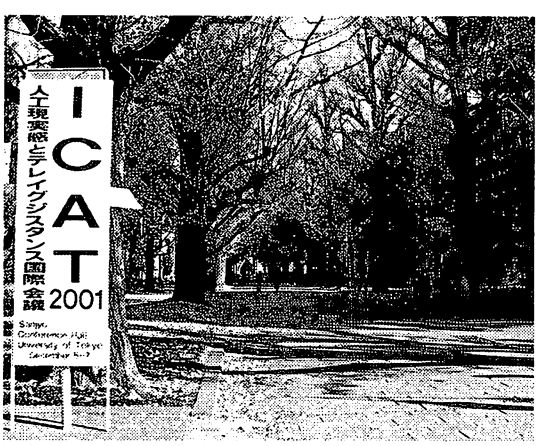
日本人参加者は英語での質問がどうしてもできず、疑問点を持ちつつもそのままですませてしまうケースが多く見受けられる。文章であるならある程度はその閾値が減るのでは？という期待から導入が決まった。

本システムは東工大佐藤研究室の長谷川助手により開発され、参加者はICAT の Web ページのプログラムから各ペーパーに関しての掲示板にアクセスが出来、コメントや質問が付けられるようになっている。残念ながら今回は周知が足りなかったためほとんど稼働していなかったようではある。しかしながら本試みはコンピュータ技術により実世界での営みである学会を増強する Augmented Reality ならぬ Augmented Conference の可能性を感じさせるものであると信じている。

今後は発表者が発表時にネットワークを利用したデモをリアルタイムに行うといった光景も見られるようになるかもしれない。



会場となった東大本郷キャンパスの銀杏並木

◆プロシーディング担当より

橋本渉

Executive Committee

今回のプロシーディング作成では、原稿管理や著者への連絡を Web を介して電子的におこなうという徹底したものでした。この優れた Web システムのおかげで、担当に残された仕事は、原稿のスタイル準備、予稿集の目次やファイナルプログラムの作成といった作業に集約されました。

目次を完成するには最低でもプログラムが確定し、その予稿ページ数を把握することが必要です。しかし原稿回収等の遅延によって完成が予定より遅れてしまい、印刷業者との窓口であった VR 学会事務局のスタッフの方々にはなにかとご迷惑をおかけしました。結果として 220 ページをこえる予稿集が完成し、ほっとしております。

◆ Web 担当より

長谷川晶一

Executive Committee

これまで C++ での VR やロボット制御プログラムの製作は経験していましたが、Web プログラミングはしたことがなく、以前から今流行の Web システムに興味を感じておりました。ちょうどそこに ICAT2001 の運営委員の話が舞い込んできましたので、自然と Web ページを担当させていただくことになりました。

今回、投稿、査読、参加登録、会議のプログラムと論文・ビデオの公開を電子化しましたが、結果として全体が統合された Web システムが完成したと自負しております。ただ、既存の Web システムを調査せずに What you see is what we get なシステムにしたため、本当に届いているのか不安を感じた方が多かったようです。また、製作しながらの公開となったため、ご不便をおかけしたことをお詫びいたします。不具合の指摘などにご協力いただきありがとうございました。

今回の Web システムは CD-ROM プロシーディングの作成の時にも威力を発揮しました。ICAT の CD-ROM をごらんになった方はお気づきと思いますが、今回の CD-ROM は Web ページをダウンロードしたものになっています。

今回分かったことのもうひとつは、Web システムは Web を使わない通常のアプリケーションソフトより面倒で不便だということです。参加費の管理などは VR 学会事務局にお願いし、データベースソフトを用いて行いましたが、Web システムでこれを代替すると開発が大変な上に不便になったと考えられます。今回は上手に使い分けができたと思います。

せっかく作ったソフトウェアですので、今後活用できるよう、今回作成したプログラムのソースを、http://sklab-www.pi.titech.ac.jp/~hase/soft/ICATPHP/ICATPHP.html に置きました。次にお鉢が回ってきた方にご活用いただけ